
気になるあの子

矢口 日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気になるあの子

【著者名】

NZコード

N9737P

【作者名】

矢口 日

【あらすじ】

あの日の帰り道。あの子が見ていた空は、どんな空だったのかな。

誰にも言つてないが実は僕には今、気になつてている子がいる。

その気になつてている子とは、朝の電車でたいてい同じ時間だつたり、
帰りの電車で時々見たりするくらいだつた。

その子が気になりだしたきっかけは、駅からの帰り道にある、信号
に止まつたときだ。

僕も止まつて青に変わるもの待つていたとき、ふと彼女を見るとボ
ーっと空を見ていた。口を少しあけて、ただボーコ。
どこを見ているのかと思つて空を見てみると、何もなかつた。首を
かしげている間に信号が変わつていた。

いつのまにか彼女は信号を渡つていてどこに行つたかわからなかつ
た。

それ以来、彼女を見かけるたびに遠くから観察してしまつていた。
それでわかつたのだが、彼女はいつも空を見ているわけではないみ
たいだ。携帯をいじつてたり、普通に待つてたりする。

どうやらあの日は、たまたま見ていただけだつたみたいだ。そのこ
とにきづくまで彼女を見ていたら、いつのまにか気になつていた。

「なあ、昼飯どうするよー。……おい。聞いてるか?」

「あ……。わり、ちょっとボーとしてた」

友人に声をかけられてたみたいだ。

「どした? 最近よくボーとしてるみたいだけど」

友人が聞いてきた。

「いや、なんでもねーよ

「悩み事があるなら聞いてもいいぞ」

「そんなんじゃねーよ。ちょっと気になることがあつてさ」

「なに、好きな女でもできた?」

「なつ、違うよ」

しまった。こいつ、この手のこするどいんだよな。

「ふーん。まあ、お兄さんに話してみ？」

そんで、しつこいんだよな。

「のあとあまりにもしつこいため、気になっている子がいること

を話してしまった。

「なるほどな）。おまえにもやつと好きな子ができたか」

「だから気になってるだけだつて」

「あんだけボーッとするほど気になつてんだろ。好きつて証拠だよ」

「……確かに。そう言われるとなあ」

「そうだろ。勇気出して話しかけてみろよ」

このあと友人から、女の子の口説き方なるものを聞かされた（強制）。

その日の帰り道、友人のかなり胡散臭い講座を聞き流し、家に帰ろうと駅に向かう途中で、目の前の女の子がポロッと何かを落とした。

「すみません。これ、落としましたよ

拾つて声をかけた。

「えっ、あつありがとうございまーす」

女の子があわてて振り返つてお礼を言つてくれた。

一瞬、彼女だつたりしないかと思つてしまつた。彼女はあんな後姿ではないし、友人のせいでいつも帰る時間ですらない。それに何かを落として気づかないで、僕が拾うなんて出来すぎている。そんなことを考えていたら電車が来ていた。

車内でそれとなく彼女を探したけど、いたのはさつきの女の子だつた。そのうちに目的の駅に着いた。

携帯で現在の時刻を確認しながら改札を出て、いつもの信号の前で止まつたとき、「今日は会えるわけないのに、なに期待してんだか

つと思わずつぶやきながら空を見た。さみしい空に見えた。

気づいたら信号が変わっていた。なんとなく下がってしまったテンションのまま横断していると、信号が点滅してきた。小走りして渡りきったとき、なぜか後ろから僕を呼ぶ声がした。

「ちょっと待つてください。そこのひとー」

振り向くと彼女だった。信号の向こう側、さつきまで僕がいた場所で手を振っている。どうやら本当に僕を呼んでいるみたいなので、手を振り返してみた。するとまた、嬉しそうに手を振ってくれた。そのうちに信号が変わり、彼女がこっしきに走ってきた。

「えっと、なんですか？」

突然のことでの緊張しながら言ひた。

「急に声をかけてすみません。あの携帯落としてましたよ」

彼女が僕の携帯を渡してきた。

「えっ、あ、ほんとだ」

あわててポケットを確認する。携帯はなかつた。

「改札を出た所あたりに落ちてまして、……もしかしてあなたのでないかと」

彼女は少し息があがっていた。

「それは本当にありがとう。でもなんで僕のだとわかつたんですか？」

「えっと、その、いつもたいてい電車の時間が一緒じゃないですか。なので、あなたの携帯をなんどか見たことがあって、覚えていたというか……」

彼女が少しもじもじしながら言ひた。

「つてことは、僕のこと覚えてるんですか」

あまりのことに驚きながら言ひた。

「そりゃあ、よく駅で見かける顔くらいは覚えますよ。逆に私のことはわかりませんか？」

「そ、そうですね。よくここに信号と一緒になつたりするし……」

「ですよね。……では私はそろそろ帰らないと。その、……また明

「田」

彼女はそう言って走つて行つた。

「えっ、あ……」

突然話しかけられたと思つていたら、急に帰つてしまつた。あまりの出来事に、僕はしばらくその場に立ち尽くしていた。

「……名前……聞いとけばよかつた」

やつと出てきた言葉は、彼女と話せた喜びや驚きではなく、彼女が帰つてしまつた寂しさからきたものだつた。

彼女と別れた後の帰り道。信号ではあんなにテンションが下がつていたくせに、今はすっかり舞い上がつっていた。

彼女と話すことが出来ただけで、こんなにも嬉しい気持ちになるなんて。どうやら僕は友人が言つていたとおり、彼女が好きだつたみたいだ。

「なんだかんだであいつに話してなきや、今の僕はいないんだよな」そんなことを考えていたら家に着いた。

玄関を開ける前に空を見てみた。信号でみた空と同じ空のはずなのに、透き通つていてきれいだと思つた。
なんとなく、あの日彼女が見ていたのも、この空だったんじゃない
かと思つてしまつた。

「……彼女も今、同じ空を見ていたらしいな」

なんて、がらにもないことを言いながら家に入つた。

明日、彼女を見かけたら声をかけてみよう。そして改めてお礼を言つてから、名前を聞こづ。

(後書き)

初めましての方は初めまして、前作を読んでくれた方はお久しぶりです。矢口田です。

矢口田は、これが始めて書いた恋愛ものになります。私は最後まで楽しみながら書いたのですが、読み手の皆様には楽しんで頂けたでしょうか。・・・ちゃんと恋愛ものになっていたでしょうか。

もし楽しめたと言って頂けたのなら、嬉しくて泣いてしまいます。もし楽しめなかつたのなら、どこがダメだったのか教えてください。どんな感想でもかまいません。良いと言われたら嬉しいですし、悪い所は直すように努力させてもらいます。

最後に、ここまで読んでくださりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9737p/>

気になるあの子

2011年10月8日02時54分発行